

## &lt;業界レポート&gt;

## エジプトのりん資源とその開発

(2025年12月28日作成)

エジプトはアフリカ大陸の北東端に位置する共和制国家、西にリビア、南にスーダン、北東のシナイ半島ではイスラエルとパレスチナのガザ地区と国境を接して、北部は地中海、東部は紅海に面している。面積 101 万 km<sup>2</sup>、人口 1 億 1654 万人（2024 年）、アラブ諸国で最も人口の多い国である。

また、降雨量が少なく、水源が乏しい国の一として知られており、南北に流れるナイル川の河谷とデルタ地帯以外は 95%以上の国土は砂漠である。

エジプトは豊富なりん資源を有し、アメリカ地質調査所（USGS）2025 年の報告によれば、すでに確認されたりん資源量は 28 億トン、モロッコ、中国に次ぐ世界第 3 位である。ただし、開発が進まず、2023～2024 会計年度の採掘量約 1,100 万トン、中国、モロッコ、アメリカ、ロシア、ヨルダン、サウジアラビアに次ぐ世界第 7 位である。採掘されたりん鉱石は大半が輸出され、国内にりん酸肥料に加工される量が少ない。2023 年のりん鉱石輸出金額 5.81 億ドル、りん酸肥料輸出金額 4.41 億ドルの合計 10.22 億ドル、その年のエジプト全体輸出金額の 1.9%しかない。なお、2024 年エジプトのりん鉱石（精鉱）輸出量 520 万トン、2025 年に 600 万トンの輸出を目標とする。

## 一、エジプトリん資源の所在地域とその特徴

エジプトのりん鉱床は海洋沈積岩型で、後期白亜紀～古第三紀の期間に海進イベントにより中東および北アフリカに広がるテチスりん生成地域に属し、堆積相は黒色頁岩、石灰岩、海緑岩、チャート、シルト岩を含む成層浅海相である。その鉱床帯が紅海沿岸の Safaga と Quseir 間の地域からナイル渓谷の Idfu-Qena 地域（El-Sebaiya と El-Mahamid）を経て、西部砂漠の Abu Tartur 高原まで帶状に延びて、大部分は P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> 含有量 25～32% の非常に良質な鉱石である。埋蔵が浅く、採掘しやすいが、降雨量が極端少なく、乾燥している過疎地域で、輸送手段も限られて、その開発が困難である。以下はこの 3 つの地域のりん資源特徴について簡単に紹介する。

図 1 はエジプトのりん資源分布状態を示す地図である。

### 1. Quseir と Safaga の間の紅海沿岸地域

Quseir 地域から Safaga 地域にかけての紅海沿岸（緯度 25° 50'～26° 47'、経度 33° 45'～34° 25'）は、Arab Nubia 山岳とスエズ湾の境界に位置し、複雑な断層が多い。りん鉱床は Nubia 砂岩を基底にして、その上にりん酸塩を含む duwi 層が覆っている状態である。

Quseir 地域では、商業的採掘可能なりん酸塩鉱石層の厚さは 0.2m～2.9m で、その鉱石の  $P_2O_5$  含有量 20～32% である。Safaga 地域では、りん酸塩鉱石層の厚さはほとんど 2.7m に達し、鉱石の  $P_2O_5$  含有量 14%～33% である。

## 2. ナイル渓谷の Idfu-Qena 地域

Idfu-Qena 地域はナイル川流域の両岸、緯度  $25^{\circ} \sim 30^{\circ}$  、経度  $32^{\circ} \sim 30^{\circ}$  の間に位置している。地殻構造上にナイル川向斜の北東斜面と緩やかな褶曲、そして北西方向に延びる広域断層によって構成されている。りん酸塩を含む duwi 層は、ナイル渓谷によく発達している。

この地域のりん鉱床は、頁岩層を挟む複数のりん酸塩鉱石層から構成されている。各りん鉱石層の厚さは 0.2m から 1.7m の範囲で変化し、鉱石の品位は  $P_2O_5$  10～25% の範囲である。なお、各層のりん鉱石の化学組成はその挟む頁岩によって異なる。

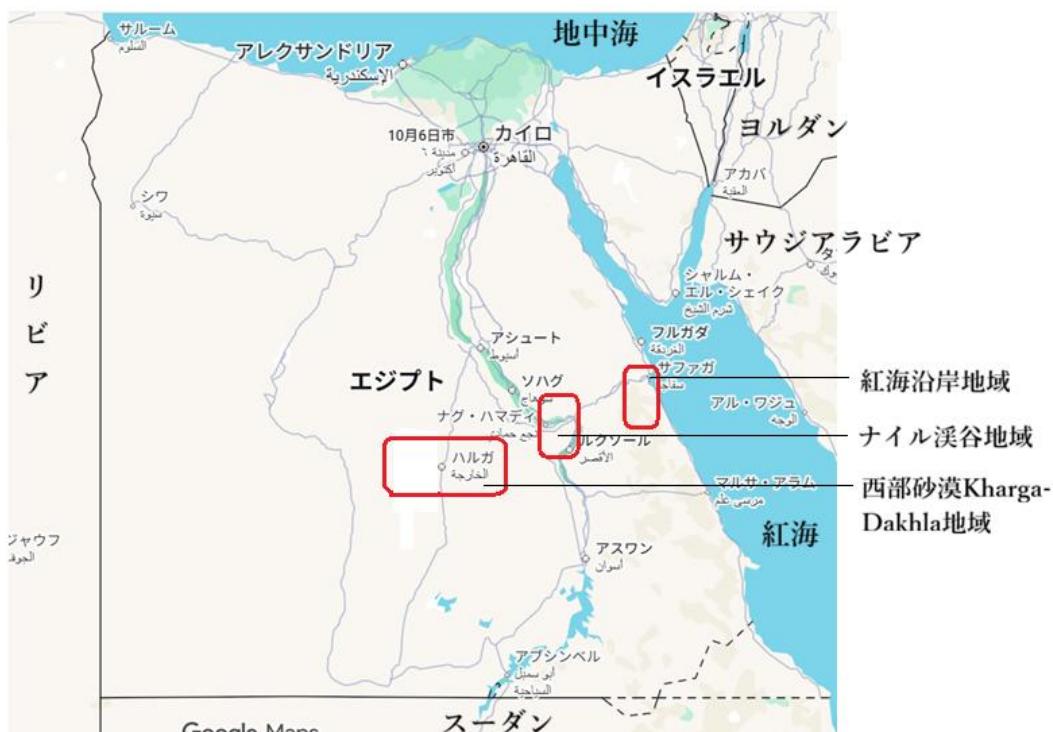


図 1. エジプトのりん資源分布図

## 3. Abu Tartur 高原を含む西部砂漠の Kharga-Dakhla 地域

西部砂漠の南部に位置する Kharga-Dakhla 地域には、りん鉱石層が広く分布している。この地域のりん鉱床は Kharga オアシスから西に Dakhla オアシスまで広がり、その間に Abu Tartur 高原地域が含まれている。りん酸塩は duwi 層に集中しており、その特徴はナイル渓谷や紅海と類似している。

Kharga-Dakhla 地域はほぼ水平な地層で、中程度の褶曲があり、南北方向に延びる断層が Kharga オアシスの構造を支配している。Kharga-Dakhla 地域のりん鉱床はさらに東から西に Kharga 地域、Abu Tartur 地域と Dakhla 地域の 3 つに分けられる。

Kharga 地域ではりん鉱石層の  $P_2O_5$  含有量は 10% 未満から最大 28% まで幅広く変化し、平均は約 17% である。Dakhla 地域ではりん鉱石層の  $P_2O_5$  含有量は 13.3% から 30% まで変化し、平均品位は約 21% である。Abu Tartur 地域ではりん鉱石の品質が一番よく、最大  $P_2O_5$  含有量は 29.78% で、平均は約 26% である。

## 二、エジプトのりん資源開発とりん酸肥料生産の歴史

19世紀末、エジプトの紅海沿岸にりん鉱床が発見され、1908 年からりん鉱石の採掘が開始された。その後はナイル川上流渓谷のキナ市 (Qena) の付近にもりん鉱床が発見された。

最初は民間または外資による小規模の開発だったが、1953 年エジプトが王政から共和制へ移行した後、鉱産資源などの国有化が進み、1960 年 5 月 23 日の共和国令第 914 号により、ほとんどのりん鉱山が国有化される。公共事業省に所属する Nasr Company for Phosphates 社（現在の El Nasr Mining 社）が設立され、紅海地域の Safaga りん鉱山、Hamraouine りん鉱山、Al Quseir りん鉱山、South Marsa Alam りん鉱山の採掘と精製販売を統括するようになった。

また、1981 年のエジプト法 159 号に基づき、2009 年 10 月エジプト国立投資銀行、エジプト鉱物資源庁、エジプト国営石油公社と国営ガスープ・エル・ワディ石油持株会社 (GANOPE) の 4 者が出資し、Misr Phosphate 社が設立して、エジプトでの新規りん鉱山開発とりん鉱石の採掘と精鉱を担当するようになってから開発が加速された。

Misr Phosphate 社は 2018 年に紅海沿岸に探鉱が始まり、2019 年に Misr Phosphate 社が大統領令第 12/2019 号により、すでに開発されているアブ・タルトゥールりん鉱山の操業許可を取得した。

エジプトのりん鉱石採掘量（精鉱量）は、1977 年の 58.1 万トンから 2010 年には約 200 万トンに増加し、2013 年に 500 万トンになった。その後も 500~1000 万トン台を維持している。アブ・タルトゥール鉱山の開発と稼働がりん鉱石採掘量の大幅な増加に大きく貢献している。

りん酸肥料産業は 1936 年 Kafr AL Zaiyat にりん酸肥料工場を建設し、紅海沿岸の鉱山から採掘されたりん鉱石を原料に過りん酸石灰の生産から始まった。その後、1946 年 Abu Zaabal に、1970 年 Assuit に、2 つの過りん酸石灰工場が増設され、3 つの工場の総生産量は年間約 60 万トンである。1965 年から過りん酸石灰の輸出も始まり、1970 年に 9.3 万トンも輸出された。主な輸出先はアラブ諸国であった。

ただし、その後は長らく採掘されたりん鉱石はその輸出に重点を置き、国内にりん酸とりん酸肥料工場を新設する動きが全くない。1990年代以降、国内りん酸肥料需要量の増加と近隣ヨルダンやサウジアラビアのりん資源開発とりん酸肥料工業の快速発展に伴い、過りん酸石灰の輸出が大幅に減少した。

21世紀に入ってからりん鉱石をそのまま輸出するのではなく、付加価値を最大化し、経済的リターンを高めることを目指して、再び新規りん酸とりん酸肥料工場の建設が計画されるようになった。2003年にSCFPりん酸肥料工場を建設し、2007年から過りん酸石灰の生産が開始した。2016年にAin Sokhna化学肥料複合施設の建設が開始し、2018年にりん酸とりん酸肥料プラントが稼働し始めた。2019年に国営AT-PHOS社を設立し、アブ・タルトゥール鉱山にりん酸工場を建設するプロジェクトを担当する。当該プロジェクトは2期に分けて、年間生産能力50万トンりん酸( $P_2O_5$ 換算)を生産する。第1期は2026年初頭着工、2028年商業運用が開始される予定である。

また、Misr Phosphate社もりん酸肥料事業に進出して、Ain Sokhnaにりん酸肥料工場を建設し、DAP、MAP、NPK化成肥料を生産する計画を打ちあげた。工場の年間生産能力はりん酸32万トン、硫酸102.3万トン、DAP60万トンである。2026年第2四半期から着工、2028年に完成する予定である。

### 三、エジプトのりん鉱山とりん酸肥料工場

2025年現在稼働しているエジプトのりん鉱山とりん酸肥料工場を簡単に紹介する。

#### 1. アブ・タルトゥール(Abu Tartur)鉱山

1961年、エジプト西部砂漠のEl-Kharga市の西約50~60kmに位置するAbu Tartur高原にりん鉱床が発見され、1970年にAbu Tartur高原 $112\text{km}^2$ の面積を対象に大規模な地質掘削探査プログラムが開始され、約9億8000万トンのりん鉱石埋蔵量が確認された。Abu Tarturりん鉱床は推定で約10億トンのりん鉱石資源量があり、 $P_2O_5$ 品位は最大31%に達し、エジプト最大のりん鉱床で、世界でも最大級のりん鉱床の一つである。

アブ・タルトゥール鉱山は1990年代から稼働し始め、ロングウォール方式(長壁後退採掘)を用いた露天採掘を行う。

アブ・タルトゥール鉱山は採掘切羽と選鉱プラントの2つの主要な生産ユニットから構成されている。採掘された鉱石は回転式破碎機で破碎されてから篩分けをかけて、大粒径(60mm以上)のりん鉱石と異物としてのドロマイドと粘土が分離される。その後、鉱石はそれぞれ4万トンの容量を持つ2つのホッパーに貯蔵する。

選鉱プラントは浮遊選鉱を採用する。鉱石は選鉱工場に移されてから、洗浄、湿式選鉱、浮遊選鉱、スクリーン濾過、磁気分離、脱水などの工程を経て、 $P_2O_5$ 含有量が30.5~31.2%の精鉱として出荷される。ただし、砂漠地域での水不足のため、ほとんどのりん鉱石は粉碎と分離だけで $P_2O_5$ 含有量27%以上の精鉱として出荷される。

アブ・タルトゥール鉱山の年間採掘能力 400 万トン、選鉱後の精鉱 220 万トンと設計されるが、その後数回の拡張により、2025 年現在の年間採掘能力 700 万トン以上、選鉱後の精鉱 500 万トンに増加された。

図 2 はアブ・タルトゥール鉱山の写真である。



りん鉱石の採掘作業



採掘されたりん鉱石の粉碎・分離

図 2. アブ・タルトゥール鉱山 (Journal of Sedimentary Environments より引用)

## 2. エル・セバイヤ (El-Sebaiya) 鉱山

ナイル渓谷に 5 億トン以上のりん鉱石資源量があると推定されるが、上エジプトのアスワン県ナイル渓谷の東岸（東セバイヤ）と西岸（西セバイヤ）の間に位置する Sebaiya 地域は、推定 7,000 万トン良質のりん鉱石埋蔵量を有し、その  $P_2O_5$  含有量が高く（28～30%）、埋蔵層が浅く、露天採掘が可能である。

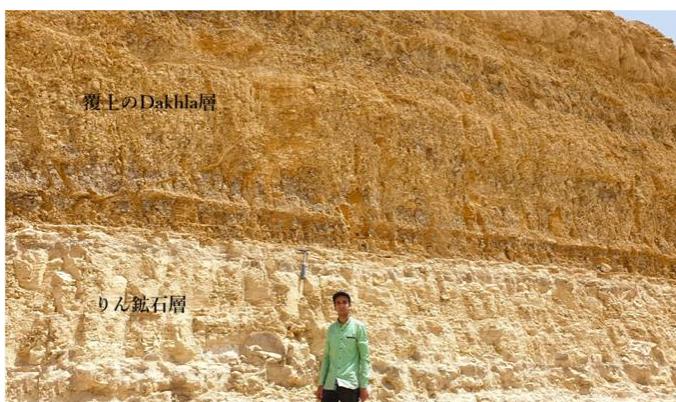
エル・セバイヤ鉱山は面積約 25km<sup>2</sup>で、ナイル川を中間線に東と西に分けられ、東セバイヤ鉱山は El Nasr Mining 社が、西セバイヤ鉱山は Abu Zaabal Fertilizers and Chemical 社がそれぞれ所有する。

1940 年代中期に Abu Zaabal Fertilizers and Chemical 社は西セバイヤ鉱山を開発し始めた。採掘されたりん鉱石が精鉱されてからカイロ地区にある自社の Abu Zaabal 肥料生産工場に運び、過りん酸石灰の生産に供する。

1989 年 El Nasr Mining 社はセバイヤ東部で大規模な開発事業を開始し、新しい設備の導入や選鉱プラントの建設を行い、東セバイヤ鉱山を開山した。1993～1994 年度の生産量は 78,000 トン精鉱（29%  $P_2O_5$ ）であった。その後、El Nasr Mining 社は粉碎と分級、洗浄のみで 30～31% の  $P_2O_5$  精鉱を生産できる高品位鉱石の新鉱脈を発見し、精鉱コストが劇的に下がった。2000 年代初頭から年間精鉱生産能力が 50 万トンに拡張された。なお、精鉱されたりん鉱石は Kafr El zayat リン酸肥料工場と SCFP りん酸肥料工場に供給するほか、一部が輸出される。

Abu Zaabal Fertilizers and Chemical 社も 1992 年末に新たな選鉱工場を設置してりん鉱石採掘能力 160 万トン、選鉱能力 100 万トンに増強した。生産されたりん鉱石は一部が自社の Abu Zaabal 肥料生産工場に過りん酸石灰の生産に供し、一部が輸出される。

図3はエル・セバイヤ鉱山の写真である。



鉱山の採掘面（りん鉱石層と覆土の Dakhla 層）



りん鉱石の粉碎分離

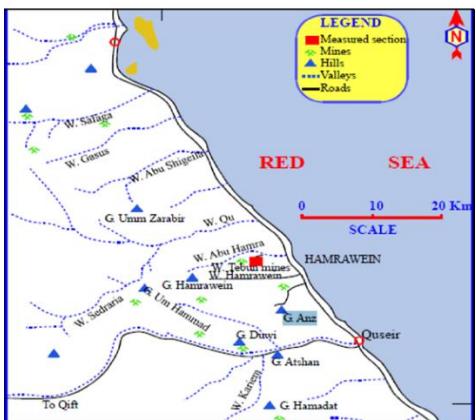
図3. エル・セバイヤ鉱山

(International Journal of Environmental Science and Technology より引用)

### 3. 紅海 (Red Sea) 鉱山

19世紀末、エジプトのクセイル (Quseir) からバール・サファガ (Bar Safaga) 辺りの紅海沿岸地域にりん鉱床が発見され、1908年からりん鉱石の採掘が開始された。南北約40km、東西約20kmの範囲に12か所からりん鉱石が採掘された（バール・サファガ地域では Um El Huetat Gasus、Wasif、Mohamed Rabah の3か所、クセイル地域では Gabal Duwi、Nasser、Atshan、Hamadat Tundub、Gihaina、Anz、Zug El Bahar、Abu Shigeila、Hamrawein の9か所）。現在でもいくつかの場所からりん鉱石が採掘されている。

図4は紅海鉱山の写真である。



紅海鉱山所在地図（▲はりん鉱山）

(Mahmoud Zanaty より引用)



りん鉱石の採掘

(Kinked in より引用)

図4. 紅海鉱山

クセイル地域では、りん鉱石層の厚さは 0.2m～2.9m で、りん鉱石の P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> 含有量 20～32% である。サファガ地域では、りん鉱石層の厚さは 2.7m に達し、りん鉱石の P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> 含有量 14%～33% である。露天採掘を行う。採掘されたりん鉱石は粉碎と分離選鉱を行い、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> 含有量 27～32% の精鉱として出荷する。

#### 4. Kafr El-Zayat りん酸肥料工場

Egyptian Financial and Industrial 社（エジプト金融工業会社(EFIC)）所有の Kafr El-Zayat りん酸肥料工場は 1935 年に設立したエジプト最初のりん酸肥料工場で、エジプト北部ナイルデルタのガルビア県（Gharbiyya governorate）Kafr El-Zayat 市に位置する。

1937 年から過りん酸石灰の商業生産が始まった。原料りん鉱石は全量紅海鉱山から供給される。最初の年間過りん酸石灰生産能力は 25,000 トンであったが、現在の年間生産能力約 17.5 万トンに拡張された。

図 5 は Kafr El-Zayat りん酸肥料工場の写真である。



図 5. Kafr El-Zayat りん酸肥料工場 (EFIC より引用)

#### 5. Assuit りん酸肥料工場

Egyptian Financial and Industrial 社（エジプト金融工業会社(EFIC)）所有の Assuit りん酸肥料工場はエジプト中部ナイル渓谷地域のアシウト県（Assuit governorate）mankabad 市に位置する。エル・セバイヤ鉱山の開発に伴い、1970 年に Assuit りん酸肥料工場が建設された。

1971 年から過りん酸石灰の商業生産が始まった。原料りん鉱石は全量エル・セバイヤ鉱山から供給される。年間過りん酸石灰の生産能力 20.5 万トンである。

図 6 は Assuit りん酸肥料工場の写真である。



図 6. Assuit りん酸肥料工場 (EFIC より引用)

## 6. SCFP りん酸肥料工場

SCFP りん酸肥料工場はエジプト金融工業会社(EFIC)の子会社として 2002 年に設立された Suez Company for Fertilizer Production (SCFP) の工場で、エジプト北東部ナイルデルタのスエズ県 (Suez governorate) Ain Sokhna 町に位置している。

2003 年から工場建設が始まり、2007 年から過りん酸石灰の商業生産が始まった。原料りん鉱石は紅海鉱山とエル・セバイヤ鉱山から供給される。年間過りん酸石灰の生産能力 30 万トンで、飼料用添加剤りん酸二カルシウム生産能力 2 万トンである。

図 7 は SCFP りん酸肥料工場の写真である。



図 7. SCFP りん酸肥料工場

## 7. Abu Zaabal りん酸肥料工場

1940 年代中期に民間企業の Abu Zaabal Fertilizers and Chemical 社は西セバイヤ鉱山を開発し始めた。1946 年カイロ近所のカリュビア県 (Qalyubia Governorate) Abu Zaabal 市にりん酸肥料工場を建設し、1947 年から過りん酸石灰の商業生産が始まった。

年間生産能力は過りん酸石灰 58.5 万トンのほか、重過りん酸石灰 8.7 万トン、りん酸 4.1 万トン（大部分が重過りん酸の生産に使用）もあり、エジプト最大のりん酸肥料工場である。原料りん鉱石は自社の西セバイヤ鉱山から供給される。なお、2002 年 Abu Zaabal Fertilizers and Chemical 社は Polyserve グループに入った。

図 8 は Abu Zaabal りん酸肥料工場の写真である。



図 8. Abu Zaabal りん酸肥料工場 (Sulphuric Acid on the Web より引用)

### 8. Ain Sokhna 化学肥料複合施設 (Ain Sokhna fertilizer complex)

軍関係の El-Nasr Company 社が所有する Ain Sokhna 化学肥料複合施設はエジプト北東部ナイルデルタのスエズ県 (Suez governorate) Ain Sokhna 町に位置している。複合施設は年間生産能力 40 万トンのアンモニア工場、30 万トンの尿素合成工場、30 万トンの大粒尿素造粒工場、16.5 万トンの硝酸工場、20 万トンの硝安工場、36 万トン DAP と 22.5 万トン重過りん酸石灰 (TSP) のりん酸肥料工場、硫酸工場、海水淡水化工場など 9 つの工場から構成される。

第 1 期のりん酸肥料工場は 2016 年着工、2019 年 8 月に一部完成し、重過りん酸石灰の生産が始まった。2023 年 DAP の生産も開始した。原料りん鉱石はアブ・タルトゥール鉱山と東セバイヤ鉱山から供給される。

図 9 は Ain Sokhna 化学肥料複合施設の写真である。

上記稼働しているりん酸肥料工場のほか、計画されているりん酸肥料プロジェクトが 3 件ある。

#### 1. El Wady for Phosphate Industries & Fertilizers (WAPHCO) プロジェクト

2019 年、アブ・タルトゥール鉱山にりん酸工場を建設するために Misr Phosphate 社をはじめ、国営 10 社が出資して AT-PHOS 社を設立し、アブ・タルトゥール鉱山に El

Wady for Phosphate Industries & Fertilizers プロジェクトを実施する。当該プロジェクトは2期に分けて、合計年間生産能力50万トンりん酸（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>換算）の工場を建設する。第1期は2026年初頭着工、2028年商業運用が開始される予定で、中国建設工程総公司（CSCEC）と華東工程科学技術有限公司（ECEC）の中国コンソーシアムが建設を請負う。



図9. Ain Sokhna 化学肥料複合施設

## 2. Ain Sokhna りん酸肥料工場プロジェクト

2024年、Misr Phosphate社はりん酸肥料事業に進出することを表明した。その計画はインドのIndorama社と合弁で、スエズ県Ain Sokhnaにりん酸肥料工場を建設し、DAP、MAP、NPK化成肥料を生産する。工場の年間生産能力はりん酸32万トン、硫酸102.3万トン、DAP60万トンである。2026年第2四半期から着工、2028年に完成する予定である。

## 3. Asia Potash社のりん鉱山とりん酸肥料プロジェクト

2025年1月、中国系のAsia Potash社はエジプトにりん酸肥料産業複合施設を建設する計画を打ち出した。

肥料工場とりん鉱石の採掘場所は、ルクソール県エスナ市西側から南のアスワン県セバイヤまでの広い地域を想定している。第1フェーズには16億ドルを投資し、年間200万トンのりん鉱石を採掘して、りん酸肥料の生産に供する。生産されたりん酸肥料が全量紅海のSafaga港を通して輸出される。第1フェーズは建設開始から1年半以内に完成すると計画されるが、いつ建設が開始するかは不明。

最終的に年間1000万トンりん鉱石を採掘して、りん酸肥料の生産に供するという。

#### 四、エジプトのりん鉱山開発会社とりん酸肥料生産会社

エジプトは1953年に王政から共和制へ移行した後、鉱産資源などの国有化が進み、りん鉱山も例外ではない。2025年現在、りん鉱山開発とりん酸肥料生産にかかる会社は1社を除き、すべて国営会社である。以下はエジプトのりん鉱山開発会社とりん酸肥料生産会社を簡単に紹介する。

##### 1. Misr Phosphate 社

Misr Phosphate 社は1981年のエジプト法159号に基づき、2009年10月にエジプト国立投資銀行、エジプト鉱物資源庁、エジプト国営石油公社と国営 GANOPE 社の4者が出資して設立された国営会社で、りん鉱山開発とりん鉱石の採掘・精鉱を担当する。所有するりん鉱山はアブ・タルトゥール鉱山と紅海鉱山の一部である。また、2019年に大統領令第12/2019号により、アブ・タルトゥール鉱山総面積220km<sup>2</sup>の全域独占開発許可を取得了。年間りん鉱石の採掘・精鉱能力500万トン。

本社所在地： 9 Ahmed Hassan St. from Mostafa El Nahas St., 9th District Area No.2, Block C Services, Nasr City, Cairo, Egypt

##### 2. El Nasr Mining 社

紅海鉱山の国有化に合わせて1960年5月23日に共和国令第914号により設立された「El Nasr Phosphate Rock」社は、紅海鉱山の複数のりん鉱石採掘会社を合併統合した公事業省に所属する軍関係の会社である。その後、エジプト最南端、スーダンとの国境を接するAbu Ghosoun地域のアルミナイト鉱山なども併合し、鉱産物の開発で事業が拡大することを受け、社名を「El Nasr Mining」社に変更した。現在、りん鉱山としては紅海鉱山の一部と東セバイヤ鉱山を所有する。

本社所在地： El Mahameid, Edfo, Aswan, Egypt

カイロ事務所： El Doky Square, 4 Dr.Mohamed Hamed Fahmy St., El Doky, Cairo, Egypt

##### 3. Egyptian Financial and Industrial 社 (EFIC)

Egyptian Financial and Industrial 社 (EFIC)（エジプト金融工業会社）は1929年5月30日に発布された王令に基づいて設立され、王政から共和制への移行した後に国有化されたが、1996年に株式の一部を売り出して、国が最大株主とする株式会社となった。りん酸肥料を生産するエジプト最大級の企業の一つで、Kafr El-Zayat、Assuit、SCFPの3つのりん酸肥料工場を所有し、年間約75万トンの過りん酸石灰と飼料用添加剤を生産する。

本社所在地： 51Ahmed Maher St, Kafr EL-Zayat, Gharbia, Egypt

##### 4. Abu Zaabal Fertilizers and Chemical 社 (AZFC)

Abu Zaabal Fertilizers and Chemical 社は 1947 年、西セバイヤ鉱山を開発するために設立された民間会社である。所有の西セバイヤ鉱山から採掘されたりん鉱石は精鉱されてからカイロ近所にある自社の Abu Zaabal 肥料生産工場に過りん酸石灰と重過りん酸石灰の生産に供する。年間約 50 万トン過りん酸石灰と重過りん酸石灰を生産する。2002 年 Polyserve グループに入った。

本社所在地： El Moahda Rd., Abu Zaabal, Mahager Abu Zaabal, Egypt

#### 5. Egyptian Marketing Company for Phosphate and Fertilizers 社 (EMPHCO)

エジプトりん鉱石・肥料マーケティング社 (EMPHCO) は 2018 年 10 月 9 日に設立された国営のりん鉱石とりん酸肥料専門貿易会社である。2019 年 4 月 24 日の閣僚会議に議決した第 39 号決議により、Misr Phosphate 社などのりん鉱石とりん酸肥料輸出はすべて EMPHCO 社が担当することを決定した。2025 年に 600 万トンりん鉱石を輸出する計画である。

本社所在地： 9 Ahmed Hassan St. from Mostafa El Nahas St., 9th District Area No.2, Block C Services, Nasr City, Cairo, Egypt